2019.11.25 りそなアジア・オセアニア財団第7回環境シンポジウム（於：シティプラザ大阪）
パネルディスカッション講演録

「SDGs対話」

コーディネーター	総合地球環境学研究所教授	阿部　健一
パネリスト	東京大学大学院総合文化研究科教授	梶谷　真司
	特定非営利活動法人パルシック代表理事	井上　禮子
	アイ・シー・ネット株式会社事業開発部マネージャー	井上　真
	株式会社りそな銀行事業戦略サポート部マネージャー	中嶋　直人

（阿部） 改めまして、総合地球環境学研究所の阿部でございます。最初に二つ確認させていただきます。一つ目は皆さんお気付きだと思いますけれども、SDGs にはゴールやターゲットなど、そのような言葉があります。しかし SDGs のそういったゴール、ターゲットは達成することが実は目的ではないのです。これは繰り返し言っておかなければいけないのですが、誰一人取り残されない持続可能な社会を目指すということが目的なのです。

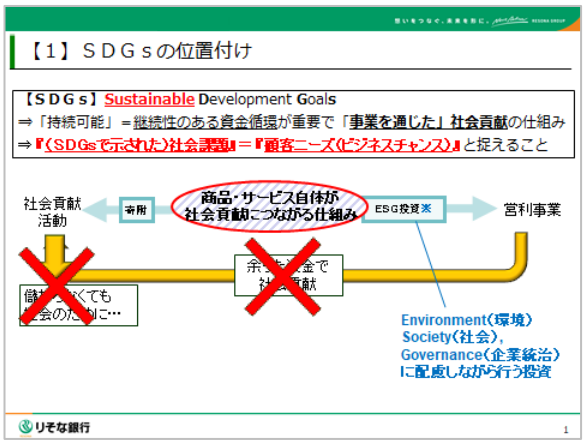
そのために私も少しだけ関わっていましたけれども、具体的に、企業、政府、あるいは一人一人がどうすればいいのかといったときに、目標を立てるというのは悪くない方法だという議論になりました。それで 17 の目標、具体的なターゲットを立てました。人というのはそういったものだと。標語だけでは持続可能な社会を目指そうと言っても、なかなか具体的に動かない。であればということで、この 17 の目標ができた。それで、細かくターゲットを決めていった。あくまでも大きな目標のための一つの手段として、SDGs というのがあるのです。これは最初に皆さんと共有しておきたいところかと思います。

もう一つは、皆さんからすごくたくさんの質問票、回答をいただきましたが、申し訳ありません。最初に言っておきます。全部はとてもご紹介できません。個別の質問については、具体的にご指名された方にお渡しするようにしますし、多くが共通の質問といいますか問い掛けみたいなものがありますので、そういったことを優先してパネルディスカッションを進めていきたいと思っています。

そのパネルディスカッションの最初です。中嶋さんにせっかくですので、りそな銀行の活動について、ぜひご紹介いただければと思います。よろしくお願いします。

（中嶋） りそな銀行の中嶋と申します。よろしくお願いします。私だけ本日初の登壇ですので、まず私のほうから、りそなグループの SDGs の取り組みについて 10 分弱ほどお時間をいただき、ご説明させていただきます。初めに、映像を 2 分ほどご覧いただきたいと思います。　～ビデオ放映～

ありがとうございました。いまの映像をご覧いただき、もしかすると、銀行は儲けや商売はさておき、社会貢献をしているのだというように映った方もいるかもしれません。しかし、りそな銀行として、りそなグループとして、SDGs の取り組みは、必ずしも社会貢献のためだけと考えているわけではないということをお伝えしておきたいと思います。

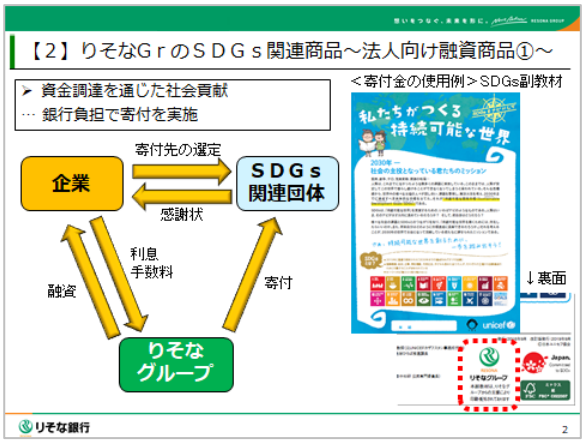


こちらのスクリーンに映している、左側に社会貢献活動、右側に営利事業と書いている、まさにこの軸が全てだと思っているのですけれども、従来、企業では、営利事業で得られた収益の一部を社会貢献に回すという取り組みが多かったです。しかしこれだと、先ほど阿部先生がおっしゃっていた持続可能性、SDGs の一番大事なサステナブルというところは満たされないと考えています。理由は、企業の余裕資金の範囲でしかお金が出せないという点。もう一つは、市場の環境によって業績が悪くなれば、この社会貢献のところはやはり縮小されてしまうからです。

一方で社会貢献活動側、左側から、もうからなくても社会のためになることをしてください、損をしなければいいでしょうとおっしゃる方もいますけれども、これでも当然、企業はついてこないということになります。つまり SDGs で一番重要なのは、このどちらからどちらというのではなくて、このちょうど中間の辺り、真ん中辺りの位置付け。事業活動自体が社会貢献に

つながるような仕組み、これが重要だと考えております。

では具体的に、間の商品とはどんなものかということですけれども、ここからりそなグループの SDGs の取り組みを、三つの商品でご説明させていただきます。



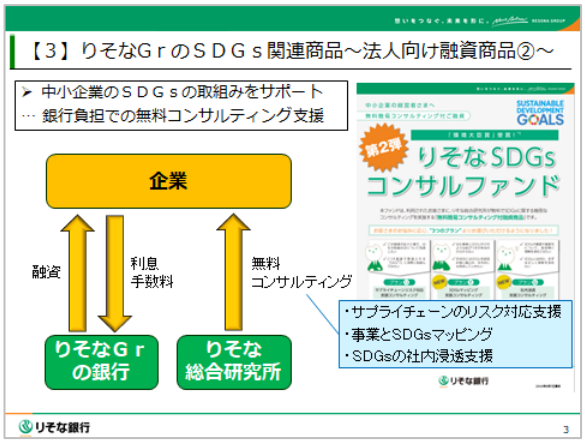
まず一つは、ご覧いただくように、まず、銀行なので社債の引受という形で企業に融資をします。ここに一味加えて、企業が指定した寄付先に対して、銀行が寄付金を出し、企業に感謝状が届く、といった商品を2年前に作りました。これは一言で言うと、選んだり感謝されたりするのは企業ですが、お金を出すのは銀行だという商品になります。

これだけ見ていただくと、銀行が結局損をするのだというように映るかもしれないですけれども、これはそうではありません。たしかに一社当たりの収益の単価は下がります。当然、寄付をして利息をその分多くもらうわけではないので下がります。

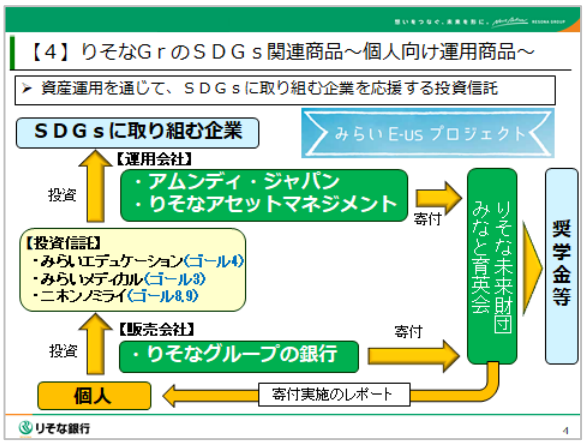
一方で、これをやったことによって、実は 2 年間で相当な数のお客さんに利用していただきました。それは既存のお客さんだけではなくて、この商品をやることによって、新たに使っていただいたお客さんもたくさんおられました。

結果的に、2 年間で約 1900 社、金額で言うと 2100 億円くらいの融資がこれで実行されたわけですけれども、そこから 2 億円の寄付を行いました。具体的な数字は言えないですけれども、銀行がこれによって増えた収益の額は、その 2 億円以上になります。つまり、これをやることによって、銀行としても商売としてももうかったというビジネスになっております。

ちなみに、その 2 億円の使い道ですけれども、その一例がこちらに出させていただいています、SDGs の副教材と書いていますけれども、これはユニセフさんの事業で、文科省や外務省と協力をして、全国の中学 3 年生、公立、私立全員に、総勢 120 万人に配布した副教材です。これは、実はうちからの寄付がなければ、紙で配布することができなかったというもので、そこにうちの寄付をあてていただきました。これによって、当然社会に、子供たちの教育上いいことをしたという自負心もあるのですけれども、りそなグループのロゴも裏面に入れていただきましたので、プロモーションにもなりました。収益上もこういったプロモーション上も、りそなグループにとっては大変うまくいった事例ということになります。全国の中学 3 年生全員ですので、ぜひ中 3 のお子さんがおられる方は、今月から 1 月くらいにかけて学校で配布されますので、裏面をご覧いただきたいと思います。



次が、これも法人向けの融資商品なのですけれども、先ほどと違うのは寄付ではなく、りそな総合研究所、りそなグループのシンクタンクですけれども、ここが無料のコンサルティングを行うというものになります。具体的なコンサルティングの内容は、サプライチェーンのリスク対応の支援や、もしくはお客さんの企業も、事業と SDGs の関係性のところをマッピングします。もしくは、SDGs の企業内での浸透をサポートするというようなものになります。先ほどの寄付をする商品というのは、あくまでお金を、資金源を生み出すための仕組みでしたけれども、こちらはもう一歩踏み込んで、お客様、借入人の企業様の、自身の SDGs の取り組みをサポートするものになります。こちらも発売を初めて、およそ半年くらいであっという間に 100 数十社、金額で言うと 200 億以上が埋まり、大変ご好評をいただいた商品になります。

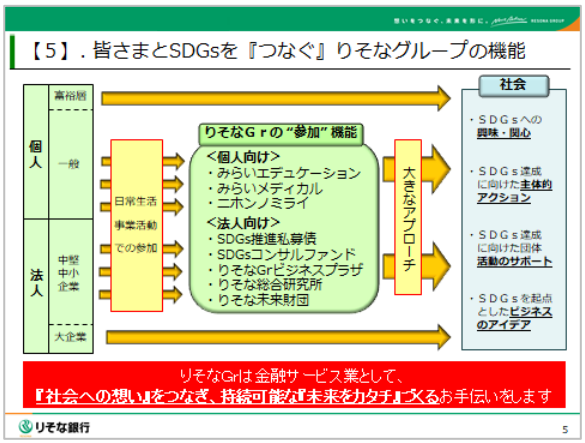


三つ目が、最初に VTR をご覧いただきましたものですけれども、個人でも参加できる運用商品です。SDGs に取り組む企業に投資する投資信託から銀行が得る収益の一部をりそ

なグループが運営する財団を通じて、高校生等の奨学金に役立てる枠組みになります。寄付金の拠出は、りそなグループ銀行だけでなく、りそなアセットマネジメントやアムンディ・ジャパンなどの外部の委託会社からの協力も得ています。一般の人にも社会との繋がりや貢献機械を提供する SDGs の枠組みを整えるために作ったものです。

そして、投資をするだけではなくて、これも販売収益もしくは運用収益の中から公益財団に寄付をして、それを奨学金等に役立てる。そして、寄付のレポートを個人の投資家の方にお送りするという商品になっております。これも大変ご好評をいただき、販売後、実は最初の 1 週間くらいでもう上限いっぱいになってしまい、いったん中止をして、また 9 月に始めたという商品になります。

この三つに共通しているのは、やはり皆さん、個人の方も法人の方も、「身を削って社会にいいことしてくださいよ」ではありません。この投資信託も、「損をしますよ、でも社会にいいですよ」と言ったら、おそらく誰も買わないと思います。そうではなくて、「これでもちゃんと運用収益を出しますし、さらに社会にいいことになります」という、この二つがそろっているからこそ、多くの賛同を得られたものだと思っております。



最後のスライドになりますけれども、まとめますと、個人の方、法人の方、富裕層の方や大企業の皆さまは、ご自身でそういった取り組みができるご資金があるかと思いますが、そうではない一般市民の方々、もしくは中堅中小企業の方々も、日常生活や事業活動を通して、りそなの商品などを通してご利用いただくことで、社会に対して大きなアプローチをしていただきたいというものが、りそなグループの取り組みになります。

まとめさせていただきますと、冒頭に申し上げた、営利企業と社会の対立軸を目指しましたけれども、ここに一般市民の方も含めて、皆さまと社会貢献というものをつないでかたちづくる役割というのを、りそなグループとして担えるようにということで、SDGs に取り組んでおります。私からは以上になります。

（阿部） 中嶋さん、ありがとうございました。さすが銀行の方で、僕がそうだなと思ったのは、やはり投資ということですね。未来に向けた、より良い未来をつくるための投資なのです。それで、もちろん銀行の場合はお金、融資などになるかもしれないですけれども、人、情報、あるいは技術といったいろいろなかたちの投資があるだろうと。アイ・シー・ネットの井上さんは最後により良き社会に向けたエコシステムの図を見せてくださいました。

もう一つ、サステナブルという言葉。これはだんだん誤解が大きくなっているのですが、もともとは持続可能なという意味で、いまは名前を少し変えたほうがいい。最近は、われわれというか国際社会では、サステナブルはイコール、トランスフォーメーションだといわれだしています。より良い社会に向けて変えていく。サステナブルって一定の持続という、いまのままという印象が強いのですけれども、そうではなく変えていくのだと。変えていくために、具体的に未来に向けたいろいろな形の投資をしていく。そういったことを、りそなの活動の中で考えていらっしゃるということで、心強い思いがしますが、とはいえというところを、これから 1 時間ほどパネリストの方と議論していければと思っています。

最初に、変なところから始めようと思います。アイ・シー・ネットの井上さんへ、コンサルタントというのは何で胡散臭いのかという質問をしたかったのですが、それよりも閉塞感ということを言われた。この閉塞感とはいったい何なのかということから、まず始めていこうと思います。いま、たしかに日本は豊かな国かもしれないですが、実はいろいろなところで、これは井上禮子さんもご指摘していましたが、実は貧しい国です。中嶋さんもそのような指摘をされていましたが、貧しい面がある。それでは、日本社会の閉塞感というのはいったい何なのでしょうか。

アイ・シー・ネットの井上さん、どこが閉塞感だと思いますか。どういった面が。つまり変えていくとしたら、閉塞感を打ち破るのはどういったところでしょうか。

（井上真） われわれが感じていた閉塞感というのは、熱い思いがあって途上国で社会貢献事業をやっているにもかかわらず、その事業が本当に現地の役に立っているのかというところに、自信を持って答えられていないというところに尽きると思います。そこはやはり、自分の夢を実現する、自己実現というところを目的で会社に入っている社員が大多数なので、夢が実現できない時点で閉塞感というのはすごく感じています。

そこでやらなきゃいけなかったのは、先ほどのトランスフォーメーションではないですが、自分たちの在り方を変えたわけです。これまでは JICA の、言ってみれば下請け企業みたいな位置付けだったところから、自分たちで事業をつくっていくのだというところにトランスフォーメーションしていったことで、自分たちのやりたいことができるようになった。もちろん難

易度は上がりますけれども、自分たちを変えるという、変えることができる勇気を持っているかどうかというところが、一つあるかと思います。

（阿部） ありがとうございました。禮子さん、ずっと NPO、NGO で、もう何年ですか、40 年、50 年くらい活動されていて、これ本当は前から聞きたかったことなのですけれども、閉塞感というか、疲れないですかと。いろいろなところで、いろいろな活動をされている。社会的な課題は次から次へと起こってくる。その社会的な課題に、一つ一つ解決に向けていろいろな努力をされて、本当にもぐら叩きのような状況ではないかと、そのような気もするのですが。その中で、少し未来、長期的なところで、NPO、NGO とすると、資金あるいはプロジェクトという形式で、3 年、5 年というかたちでやっていく。その繰り返しで終わってしまわないかというのが、僕自身も NPO に関わっているので、自分にも問い掛けていることです。禮子さんのほうで、いまこういったことを考えているのだというものがありましたら。

（井上禮） パルシックということに関わって申し上げれば、スリランカの内戦のときも、東ティモールのときも、いまはシリアの国内も始めていますので、本当に命の危機に晒されている人たちのもとに、駆け付けるというのがまず第一歩なのです。そうでないときに、平和に暮らしている人たちの村へ行って、扉を叩き「トントン、お宅、貧しいんじゃないですか」みたいなことはやりたくない。外部から見て、貧しかろうが貧しくなかろうが、そこで持続している社会であれば、私たちが何らかの助けを求めることはあるかもしれないですけれども、そこに「支援します」と押し掛けていくことは、やめたほうがいいのではないかという考え方を持っています。

そうやって、命の危機に晒されているときには、やはり外国人の存在自体に意味がある。少しでも暴力に晒される人たちに対して、何らかのかたちでの防波堤になり得るし、その状況を世界に向けて発信することで、より良く理解されることもできる。そのような緊急支援から復興へ、復興から開発へという、基本的に三段階が続きます。国によってその過程が 10 年かかるときもあるし、30 年かかることもある。たしかに、そのための資金をつくるのは大変な苦労ではあります。でも資金をつくる仕事自体は、それは私の仕事かなと思ってやっていますけれども、むしろ持続することが大変です。

ですが、やはりそのようなサイクルを考えるときに、例えば命の危機に冒されている人たちのもとに駆け付けて、最初は医薬品だったり医師だったり、それから食料になったりしますけれども、そのような物資支援が続いてしまうと、決して対等な関係にはならないのです。どうしても従属する関係、支援されることを期待する関係になっていく。当初は、そのような支援がなければ生きていかれない状態ですから従属性が発生してしまうのです。そこから今度、もう一回対等な関係を取り戻すときに、また長いプロセスが必要なのです。

ご質問の閉塞感ということに関していえば、例えばお金をつくるのが大変、支援者をつくるのが大変、いろいろ苦労があることが、別に閉塞感の原因にはならないと思います。むしろ、それによって社会がより良くなっていくことが実感できるかどうなのかというところです。その意味では SDGs にも関わりますけれども、やはり皆さんが、日本社会でもどこでもいいのですが、人と人とでコミュニケーションをちゃんとできる、つまり、人が相手の状況を理解し合い、相手の状況を我がこととして考え共有し合うということが欠けたときに、やはりどちらの社会も閉塞感に包まれるのではないか、と。残念ながら日本社会はいま、その意味ではかなり閉塞感に包まれているかなと思っています。そこを、直接、閉塞感そのものに取り組むのではなくて、例えば困っている人の課題や社会の課題に手や足を一歩向けることによって、閉塞感というのは少しでも突き破られるのではないかと思っています。

（阿部） ありがとうございます。梶谷さん、僕が本を読んだときにあっと思ったのが、考えることによって、閉塞感がなくなった、束縛から自由になるのだということを書かれていたのがすごく印象的なのです。やはり哲学対話、あるいはいま、禮子さんが言ったコミュニケーションということになるかもしれないですけれども、このような哲学対話をやることで何がどう自由になるのか、もう少し詳しく話を聞かせていただければ。

（梶谷） これもまた、少し分かりやすいという例でご紹介しようと思います。先ほど、子育て中のお母さんの話を少しご紹介しましたけれども、彼女が哲学対話をやって何が変わったかといえば、本当に普通のお母さんの発言なのですが、自分を問題から切り離せるようになったと言っていました。それまでは自分の抱えている問題が悩みで、自分がそこに一緒になっているのです。ですから苦しいのです。

問題は解決していないけれども、自分をそこから切り離して見られるようになったので、自由になれたと言うのです。彼女は本当にさらっとそういうことを言うのですけれども、その自由とは問題が解決するから自由になるのではなくて、問題をもう少し一般的な視点から考えられるようになるということです。なぜ自分がそれを悩んでいるのか、なぜそれにこだわっているのかということを考えると、自分がそこから切り離されていくのです。

それは、別に自分の個人的な問題だけではなくて、何かを支援しているときでも、その問題とその人たちの生活の苦しみが一体になっているとなかなか先に進まない。なぜそれが起きているのかということを、こちらの支援する側も向こうも理解できたときに、初めてどうするべきか、ということが分かってくるのではないかと思います。

閉塞感というのは、そういう意味で言うと、問題と自分が離れない状態が結構多いのかと思います。それこそ問題が解決しない、お金をとにかく集めるなどの、そこの苦労が別に閉塞感なわけじゃないとおっしゃいましたが、苦労などは、あまり関係ないと思います。むしろやる気になったりするかもしれない。そういう意味での自由ですかね。

ですから、これは本当にささいなレベルなのですけれども、対話をやっていると、みんなすごく元気になるのです。元気になって楽しそうにしていて、あとは仲良くなるというのがとても印象的です。

（阿部） 真さんのほうも、この信頼関係ということの重要性の中で、やはり対話、楽しくとはおっしゃらなかったかもしれませんが、話し合うことによって、信頼関係や理解し合うということなのでが、そういったことを考えて水先案内人みたいなことをやられているかと。

（井上真） 楽しむのは、すごく重要だと思っています。閉塞感があるとは、楽しめていないことだと思います。自分が楽しめていれば、そこは絶対に閉塞感がないはずです。では、自分がどうすれば楽しめるかというと、人のためなどと言いますけれども、結局は最終的に行き着くところは自分が満足できるかどうか、自己実現ができているか、自尊心を満たせているかという話にはなると思います。まず自分を見つめ直したときに、自分はいったい、本当は何をしたかったのか、そういった、もともと思っていた仕事を始めたときの思いを、しっかり常に思い返しながら事業をしていくと、あまり閉塞感というのは感じなくなるのです。

先ほど先生がおっしゃっていた「問題から切り離す」といったところも、水先案内人として、役割を果たせるのではないかなと思っています。自分の問題に自分で向き合うって結構大変です。ストレスがかかるというか、その問題の原因は何なのだろうと自分で考えていくと、ネガティブになっていくのですけれども、そこであえて第三者が入ることで、客観的に見えます。先ほどおっしゃった「問題を自分から切り離して考えることで自由になる」、「楽しく解決策を考えていける」といったところは、どんな事業でもすごく重要なことだと思います。特に、途上国で社会課題解決するような事業をやる上での水先案内人としては、そういう視点を持つことは重要です。途上国でいろいろ考えると、ないないづくしで、ものが何もないのです。そこで原因を考えても、やはりネガティブになっていってしまうので。いかにそこをポジティブに第三者的に、問題ではなくポジティブに持っていけるような視点でやっていくかというところは、重要かなと思いました。

（阿部） ありがとうございました。中嶋さん、ここでいきなり振りますけれども。「楽しくやっているのかな」と思いながら聞いているのですけれども（笑）。

（中嶋） 大変楽しいです。

（阿部） ありがとうございます（笑）。こういった、金融サービス業としてつなぐということをやってみて、これはと思う手ごたえみたいなやつは、どういったところで感じられたのかなと。

（中嶋） まず一企業としては、SDGs をこうやって私だけじゃなく社員みんな関わるようになり、逆に閉塞感が若干弱まったというか、解き放たれたかなと思っています。その一番大きな理由として、テリトリーといいますか、自社のできる領域の制約を、無意識なのか意識的なのか設けているのではないかという思いがあります。

SDGs の重要な点として、よくパートナーシップと言われますけれども、通常のビジネスだと、「自社でこういうことができるから、さらに A 社に協力してもらったらこんなこともできるのではないか」という自社発信でやりますが、SDGs でゴールから考えたときに、「これをやるためには当然自社だけではできない。ただ、こことここ、この部分があったらできるよね」というように、ゴールから考えると、いままでスタートから考えるよりも大きなことができます。というようなことを、いくつか事例で目撃していると、すごく自由になれた気がします。自社だけではできないことも関われるのではないかなということが、企業として感じたことです。

金融機関としては、やはりお金の流れの真ん中にいる金融仲介業ですので、その流れをあっちへやったりこっちへやったりできます。いまの三つの商品はまさにそうですが、お金の大きな流れをつくることで、資金を生み出すことができますので、その点では少し有利というか、特長があるかなと思いました。

（阿部） がっつり儲かってきているという実感も。

（中嶋） あまり儲けるといってしまうと（笑）。

（阿部） そうですね。儲ける。でも真さんの話ではこれは決して悪いことではない。つまり、より良き未来に向けて変えていくための必要な資金もいりますので、そう意味で言うと、儲けなければだめだということです。

（中嶋） そうですね。儲けると、みんな「次は何をやろうか、何をやろうか」ということで、ではもっとこういうことをやると、もっと社会にインパクトを与えることをやると、もっとみんなが注目するのではないか、というプラスの発想になっていきますので、重要なことかと思います。

（阿部） ありがとうございました。このパネルディスカッションは、実は企業の方と NPO、NGO、非営利団体を繋げようと思ったのですが、やはり短絡的に繋げたらいけないという感じがします。パッとすぐには、なかなか結び付かないだろうなと。むしろワンステップが要るのかということを、皆さんの話から感じました。

梶谷さん、そういった意味で、いきなりまた振りますけれども、

哲学対話。何か困ったときには全て哲学対話みたいなのですけれども。本当にこういった、一緒に考える場というのは、意外なほど少ないなと思うのですが。

（梶谷） いま大学は、産学連携ということで、企業とどこかの研究室などが協力し合あってプロジェクトを行っています。特に大学が国からの予算が削られていく中で、そういうことを非常に活発にやっているのです。僕自身も産学連携に関わったことがあります。こういったSDGsのようなものを意識して、学際的にいろいろな人たちが関わってやろうというものに巻き込まれたことがあります。

しかし例えば単に理系のある研究室と企業とが連携するわけで、もちろんある技術開発をするのに、非常に目標がはっきりしたものをやるときに産学連携をするのはいいのですが、私自身はなんとなく、最後にアリバイづくりで呼ばれている感じがするのです。最後に少し哲学者に何か言わしておけば、何かちゃんとしたことをやったのではないか、といった理由で呼ばれているような感じがあります。

これは別に悪意はないのかもしれないのですけれども、僕が連携のやり方として少しどうかと思うのは、実はもともとの、例えば大学なり企業なり、最初からやりたいことが決まっていて結び付けようとするので、非常に結び付きが限られているか、うまくいかないような感じがするのです。

最初からとりあえず何をするかという、大まかな目標は持っていていいのです。例えば貧困をなくす、教育をどうするかなどです。そこで最初からいろいろな人が入って、どういうプロジェクトをやるのか、どういう事業をやるのかという話し合いから始めていれば、それこそ先ほど中嶋さんがおっしゃったような、「こういうことをやるには、こういう人たちが要るよね」というのと同じように、「こういうことをやるのだったら、自分たちはこういうことができるよね」というのを話しながらやっていれば、もっと有意義な連携ができると思います。だけど、最初から別々のものを持ち寄って、「何か組み合わせられませんか」ということをやるので、うまくいかない気がするのです。

ですから、何か始めるのだったら、いろいろな人たちが集まって、最初から何か一緒にやっていくという場をつくるほうが、出来上がったもの同士をどう組み合わせるかを考えるよりもいいのではないかなと思います。どうですか、何か。現場で言うと、また違う感覚をお持ちなのかもしれないですけれども。

（井上禮） そのような、いろいろな人たちが関わる今回のような場自体はとても大事で、異質の者がお互いに知り合うプロセスはとても大事だと思います。と同時に、実際に具体的な事業をやることに関して言えば、先ほど大学でおっしゃった理系の特定の目的があるところ同士が、特定の目的のためにやる場合のものですが、たぶんそちらじゃないかと思います。つまり、例えば何でもいいのですけれども、この地域のここの子ども食堂を運営するという目的や、あるいは先ほど言いましたように、スリランカのこの地域の養殖をやるなどの、そのような具体的な目標があって、具体的な技術を持ち、具体的な人材を持っているところ同士が、具体的に協力し合う。その積み重ねのほうが、現実的な成果を生むのではないかと思います。ただし、それをやっていくために、今回のような様々な対話の中から、いろいろなマッチングの可能性を探していくということは必要だと思います。

（梶谷） 僕が言いたかったのは、例えばこういう不特定多数の人が集まったところで何かするのではなくて、最初から作業を一緒にやっていくようなところに、例えば、井上さんのところに直接関係なさそうに見える人も、一緒になって仕事をしているというようなことをやると、意外にその人たちが、「こういうことだったら、こういうこともできますよ」というのがスッと出て、それがすぐそこに組み込まれていくようになる。ですから、異業種交流会みたいなことをやればいいと言っているのではないのです。具体的な作業を、最初からいろいろな人たちでやっていくということです。そこに、ひょっとしたら関係ないかもしれないけれども、でもとりあえずなんとなくいて。ですから僕が、単なる事務仕事のために手伝っていてもいいと思います。哲学者に何ができるかと考え始めると、訳が分からなくなりますので。僕がとりあえずかばんを持って一緒に行って、「ご飯食べに行きます」みたいなことをやっていると、そこで見ているもので何か、僕自身が直接役に立っていなくても、僕がある研究者のことを知っていて、「こういうのだったら、こういう人に意見を聞いたりできますよ」というのがスッと出てくるわけですよね。そういうかたちの具体的な活動を一緒にやるという意味でも、そこに直接関係する人だけがいるのではなくて、そうでない人も入っているというようなことができると、もっと広がりができたりします。

（井上禮） たしかに可能性としてはありますね。ただ、どうやったらいいのか、少しやり方は難しいかなと思いますけれども。例えば私どもで、ここしばらく毎年 7000 部も 1 万部もニュースレターを郵送したりするのですけれども、そのときに IT 産業のバリバリの専門職の方々が参加してくださるのです。それで、思い切り発送作業をやってくださるのですけれども、すごく楽しんでやってくださります。日頃やっていることとまったく違うから、すごく楽しんでやってくださって、大変なしんどい発送が、すごく楽しい出来事になっています。そういうことですよね。そういう視点は必要ですね。

（梶谷） 一緒にやりつつ、話し合いの場にもいる。そうすると、何かできることがサッと出てくることはあるのかなと。

（井上禮） なかなか、かたちは思い付きにくいけれども、おっしゃる意味は分かります。

（阿部） このまま4人でやっていただいてもいいのですが、

何となく寂しい思いがしています（笑）。いまの話も少し関わると思うのですが、本来なら哲学対話というかたちで、もう少しフロアの方と話をしたいということで、質問に応えていきたいと思います。

いろいろな人からというところで、これは真さんへの質問ですが、皆さんにもお聞きしたい共通の質問とします。エコシステムはどのようなきっかけでできて、どのようにすれば機能するのか。いろいろな立場の人が集まって、概念としてはよく分かります。先ほど禮子さんから少しヒントになるようなお話しもありましたが、何かエコシステムについては、原則みたいなものももしかして有るのか、あるいはそういったものは無いのか、もう少し具体的なところから始まるということなのか。エコシステムがつながっていくきっかけ、いろいろなものがつながっていくきっかけ、そのときに大切なものなどあれば。まず真さん、禮子さん、中嶋さん、梶谷さん、の順にお答えいただければと思います。

（井上真） 既存のエコシステムは、奇跡的に偶然成り立って、アメリカなどでは出来上がったりしていると思います。これを意識的につくっていくには、私が考える必要なこととして、やはり触媒となり中心となる組織が必要なのかと。

いろいろな関係者が集まれば集まるほど、主体性が曖昧になっていくのです。企業であれ大学であれ、誰でもいいのですけれども、誰かがこの事業をここでやりたいというのがまずあって、そこに対して私も参画したいなど、点からどんどんつながって線になっていくというのがスタートになるのではないかなと。最初のそこのきっかけさえできれば、あとは事業性が魅力的だったりすれば、広がっていくかと思います。

もう一つ重要だと思っているのが、いまのいろいろな人を巻き込むというところにもつながるのですが、物理的にフェイス・トゥ・フェイスで一緒に作業をしている空間の重要性というのは、やはり大きいと思っています。これは、皆さん普通に仕事をしていても感じると思います。最近、テレワークなどいろいろ、家で働くみたいなのも進んでいると思いますけれども、やはり面と向かって仕事をしていると、どうでもいい雑談みたいな話から、ちょっとしたきっかけとして新しいアイデアが生まれてきたり、関係性ができてきたりするので、一緒の空間で仕事をするってすごく重要だと思います。

当社はいま、ケニアに法人を持っているのですけれども、法人といっても一つのビルというか部屋を借りて、いろいろな人が泊まっていいよというふうにして、簡単なホテルみたいにもしているのです。そうすると、日本人でケニアでの事業をやりたい人がどんどん集まってくるのです。普段飲んだり、くだらない話をしたりしている中で関係性が出来上がってきて、「じゃあこういう事業を一緒にやろうか」みたいな話にもなってくるので、物理的な距離の近さというところを意識的につくっていく。

例えば、コワーキングスペースというのも、そういう目的でやっているところもあると思います。スタートアップが 1 カ所に集まって、コワーキングスペースで作業していくことで、新しいシナジーを出すみたいなのをねらっているような事業会社さんもいますけれども、やはり物理的な、最近の時流に反しているとは思いますけれども、こういうデジタル的なものがどんどん発展する世界だからこそ、フェイス・トゥ・フェイスの重要性が高まっているなというのは、すごく感じています。

（阿部） ありがとうございます。禮子さん。

（井上禮） 一言で言ってしまうと、エコシステムを考える上でのキーは、地域だと思います。地域、ローカルですよね。現実的にこれだけグローバル化している社会の中で、生産をローカルにだけすること、流通をローカルだけにすることが可能だとは思っていないですけれども、しかしながら徹底的に地域ということを中心に考えて、どこはグローバルに残さなければいけないというふうに考えていくことで、エコが見えてくるのではないかと思っています。

（阿部） ありがとうございます。ちなみに、梶谷さんがわれわれの研究所で 3 年間やっていただいたプロジェクトというのが、まさにローカル。ローカルスタンダードに注目したものでした。

中嶋さんには、りそな銀行というのが触媒たり得ているか、主体的なアクターとなっているか、そこらへんも含めて、エコシステムということについてお考えを。

（中嶋） 触媒たり得ているかとまで言える自信はないのですけれども、こちらの先ほどご紹介した 2 つ目の商品は、まさにその触媒として機能するために、われわれ自身が何かお金をつくるわけでも SDGs の取り組みをするわけでもなく、われわれの取引先の法人の企業さんに、それぞれの分野で取り組んだ制度ということでやっているものです。

先ほどのエコシステムをつくるきっかけと成立する特徴、ポイントなのですけれども、アイ・シー・ネットさんが言われていたのとほとんど同じ意見なのですけれども、まずきっかけは、やはり強い目的意識を持った法人というより個人だと思います。きょうご紹介したわれわれの 3 つの商品、これはそれぞれ別に社長からやれと言われてやったわけではなくて、それぞれの領域の担当者一人の、これをやろうという思いから始まっています。それで成立して、これだけうまくいっているというものですので、まずはアイ・シー・ネットさんがおっしゃったように、点ですよね。個人の強い意識から始まるものかと思います。

成立するにはどうするかですけれども、やはりそれだけではうまくいかないものもあるので、周りの利害関係を、企業内もそうですし、企業外の、もしくは営利、非営利などですね。国

家といったそういったところと調整する、コンサルティングができる人材がその場にいるかどうか。これが成立するポイントかなと思います。

（阿部） ありがとうございます。梶谷さん。

（梶谷） これは地球研のプロジェクトをやっていたときに思っていたことで、阿部さんとの関係はそもそもそうなのですけれども、阿部さんと私は、お互い何の専門かあまり知らないというか、すごく適当な付き合いなのです。しょっちゅう会って話しますが、すごくいい加減ですよね（笑）。今年何やるかといったときも、ただ何かぐちゃぐちゃしゃべっているだけなのだけれども、必ず数カ月後にはきちんとかたちになるのです。それが僕はすごくいいと思っています。

僕のプロジェクトで関わった人は、みんなそれぞれプロフェッショナルの領域を持っているのですけれども、集まっていても、みんなそれをあまり持ち込まないのです。みんな適当なのです。ですから一緒にいやすい。「おまえたち、俺たちと違うよね」という感じがあまりなくて、ワーッとやっていて。でも何かやるというと、パパパッとかたちになるのです。そういういい加減さって結構大事だと思っています。最初から、「これはどういう問題なのですか」「これはどうすればいいんですか」とすごく細かく言われると、たぶんみんな嫌になってしまうというか。

それもあるのですけれども、エコシステムということで言うと、僕がすごくある意味エコだったのかなと思うのは、あまり役割を一つに決めない。いろいろな役割で関わり合う関係があって、だけど「得意なのはこれ」みたいなのは、何かあるのだと思います。犬だったら鼻が効くといった、そういうのがたぶんあって。猫は敏捷だといった。だけど何となく緩く、「犬と猫は何で一緒にいるのか」みたいなことは、別にうるさく考えないみたいなのがあって。

地域でいても、特にローカルなところになると、一人が一つの役割しか演じないということはないじゃないですか。ですから、お互いが何をしなきゃいけないのかみたいなことを最初から決めてしまうと、わりと不自由になってしまいがちです。ですから何となくいて、やれることをそれぞれがやっていくといったような。先ほどの話にもつながるのですけれども、そういう関係が結構大事だなと思います。そういう意味でも、動いていく中でお互いの関係ができていく。それがわりと流動的にあるときには、変わったりするようなものは、そういうある種のいい加減さが必要かと思います。

（阿部） 何か反論したい気がするのですけれども（笑）。たしかにそうかなという感じで、いい加減というのは「いい」加減というふうにとれる感じかなと思います。

（梶谷） 「いい」加減なのです。

（阿部） たしかに、最初から役割というのは実はないのかもしれないなと。お祭りがそうですよね。日常はいろいろな役割と機能、私は消防団、警察、あるいは市、企業で働いている、とありますけれども、お祭りとなるとみんなで、誰かが指図するわけでなく、「だったら、俺は」と。「ちょっと酒があるから持ってこようか」「俺はそれなら」と、いろんな役割を自分で考えて、自分でコントリビュートするというような、そういったことを少し思い出しました。

皆さんのほうからいただいた質問のほうに戻ります。きょうは近畿大学や他の大学からも若い方も来られています。教育ということで、次の人材育成。また、別のかたちで人づくりというのもいただいております。もちろん SDGs の中には教育というのもありますが、とりわけ SDGs の精神をどう伝えていけばいいのかという質問もありました。それと、同じことを少し違った言い方でされている方もあって。最近、小学校でも SDGs の教育をやっている。これは、本当にそれでいいのかと。もちろん SDGs というのを、小学生でも中学生でも高校生でも理解してもらうというのは大切なことだけれども、最初から教育というかたちで、制度的な教育の中で、現場感覚というか、本当に大切なことがもしかしたら教えられないのではないか。そういったことが、ただ知識としての SDGs ではないかたちで、どう次の世代に伝えていくべきなのか。これは、中嶋さんから順にお応えいただきましょうか。

（中嶋） SDGs の精神をどう伝えれば良いかということは、私が想定していた SDGs のことの中で一番難しい質問なのですけれども、主体というか、対象によって違うと思います。伝えるべき対象が国家もしくは非営利などの場合は、SDGs でよくリスクとチャンスと言われますけれども、やはりこれを放っておくと、こんなリスクがありますよと。存続の危機ですよということを伝えたほうが、ぴんときやすい人、自分ごとにしやすい人もいます。

一方で、おそらくきょう来られている企業は営利企業の方が多いと思いますので、そういった方の多くは、むしろリスクよりチャンスのほうで、リスクの対応は当然すると。一方で、そこに大きなビジネスチャンスがないと積極的に動こうとしないと思いますので、そういったところをしっかり強調していく。もしくは事例を見せていくということが大事だと思っております。

一番難しいのが個人のところなのですけれども、やはり SDGs という、この国連の加盟国が全部合意した開発目標と、そういったところと一市民というところが、特に先進国で生存欲求が満たされている国では、非常に遠くなってしまっていると思います。ただ、海外の取り組みが多く挙げられますけれども、そういったこともさることながら、日本国内でも貧困の問題や教育格差の問題はたくさん叫ばれています。そういった教育費の問題なんていうのは、おそらくほとんどの方に関係すると思いますので、身近なところの課題から、「これをこ

のまま続けていくと、皆さんの家庭にもこう影響しますよ」と。もしくは、お子さんがより良い教育を受けて、お子さんの、そのお子さんの世代まで続いていくためにはこうすべきだというようなところを、身近なところから訴えていくしかないかなと思っております。

（阿部） ありがとうございました。いま、中嶋さんが本当に大事なことを言ってくれたなと思っているのは、われわれは企業の方もいらっしゃるし、NPO、NGO も。われわれ大学でも、いまやっている研究は、この SDGs の、どの目標の、どのターゲットだということもしょっちゅう言われている。そういうのではなくて、組織や自分が所属しているそういったものではなくて、一人一人の個人として SDGs をどう実感できるのか、そういったことも考えて。先ほどの「教育」と言ってしまうと少し堅苦しくなりそうなので、真さんのほうには、自分ごととしてどうやってこの SDGs をというところ、どのようなお考えがあるのか、お聞かせいただければと。

（井上真） 実は、当社は最近学研グループ入りをいたしました。ちょうど、教育をどう SDGs と絡めていくか、みたいなのは常に社内でも考えているところなので、ホットトピックなのです。自分ごと化するに当たって私の考えなのですけれども、SDGs というのは、きっかけとしてはいいとは思いますけれども、しょせん 2030 年までのものですし、あまり SDGs にこだわった教育のやり方や、自分ごと化というところを考えるよりは、もう少し根本的なことを教育していくべきかと思っています。

何を若い人たちに考えてもらいたいかというと、課題に対して自分がそれを発見する力であったり、それをどう解決するかというアイデアを出す力であったり、それを自分の夢として結び付けていく力だったり。そういう一連の流れをやっていけば、必然的に SDGs にもなっていくでしょうし。社会課題解決のために、ビジネスをやりたいというのであれば企業に入るでしょうし、もう少し現場で、より住民に近いところでとなれば NPO、NGO に入っていくでしょうし。最初のスタートというのは、やはり社会課題といったところを見つける力というか、アンテナの張り方だと思います。

当社でやっているビジネスアイデアコンテストで、高校生部門をやっているのですけれども、まず彼らに何をするかというと、夢を語らせるのです。なかなか日本人は、みんなの前で自分の夢を語るって恥ずかしがってやらないのですけれども、そこをファシリテートしてこっちも夢を語ったりすると、だんだんそういう雰囲気が出来上がってきて夢を語りだすのですけれども、人によっては涙を流しながら夢を語りだすのです。いままで言えなかったけれども、実はこれを本当にやりたくて仕方がないのだと。その自分がやりたい夢をスタート地点として置いたときに、どういう事業を考えていけばいいかというようなかたちでファシリテートしていくと、本当にそれは自分ごと化した、自分のやりたいことをどう実現するかというところで、物事を考えられるようになる。それは思考訓練にもなりますし、事業が実際に実現できたら素晴らしいことだと思います。

ですので、自分ごと化するには、やはり夢という、言っていて恥ずかしくなるような言葉かもしれませんけれども、夢を真顔でみんなで話し合える場というのを最初に設定して、周りが応援する。それを語っていいんだよ、それを実現する、ライフワークとしてやっていくって素晴らしいことだというのを、周りが後押ししていくというところかなと思います。

（阿部） ありがとうございました。夢を語る、本当に大事なことかなと思います。どういうかたちでその夢というのを語らせて、そして実現していくために、SDGs をツールとして使うという言い方を真さんがされていましたけれども、その一方で、社会課題に当たっている NPO、NGO として、禮子さん、広い意味での人材育成、教育をどう考えていらっしゃるのか。

（井上禮） SDGs 全体の教育ということを言われているのだと思いますが、私としてはやはり、どうしても SDGs のゴール 4 のことが気になるのです。世界中で教育を受ける機会がないままいる子どもたちをどうするかという課題は、それとしてやはり大事な課題だと思いますので。

ゴール 4 の問題はぜひ考えなきゃならないなと思いつつ、そのことを含めた SDGs 全体を、若い人たちにどうやって伝えていくかということは、たぶんそんなに私たちが悩むことではないのではないかなと思います。どこの国でも、若い人や子どもたちって敏感なので、例えば水の問題であったり、あるいは循環だったりごみの問題であったり、そういうことを体感すると、ある意味、様々な経済的必要性などに縛られている大人以上に問題を理解してくれるのではないかなと思います。

ただ、なかなかいまの子どもたちが、そのような社会課題を直接現場で学べる機会があまりない。もう少し子供たちが自由に歩き回って、その課題について知る機会が増えていけば、もっと理解は広がるのだと思います。このあいだ、スウェーデンのグレタさんのメッセージがありましたけれども、こうした課題を未来に引き継ぐのは子どもたちの世代なわけですから、その人たちに、自分たちの未来として考えてもらうということはもっともっとやるべきだし、それはできるのではないかなと思います。子どもは比較的敏感なので、ちゃんと伝えれば伝わっていくのではないかなと思っています。

（阿部） ありがとうございました。梶谷さん。

（梶谷） 僕自身はいま、学校の運営にも関わる機会が多くて先ほど阿部さんがおっしゃっていた五ヵ瀬の中等教育学校などには、もう 5 年くらい関わっています。それと、東京都立の高校なんかにも関わっているのですが、何で関わっているかというと、考える力を育てるといった文脈で、哲学対話

を導入できないか。あとは探究学習というのがいま始まっていて、どうやってそれのカリキュラムを組んだらいいのかというのが、学校からの相談であったりしています。

それで、先ほどの閉塞感ということで言うと、すごく閉塞しています。どっちかと言うともう関わりたくないくらいです。それは何が問題かというと、たしかにこれは一つの課題の、子供たちが考える、ある種の分野として、そういうところに何か興味を持って自分たちで調べようと、それを体験することも含めてやれたらそれでいいのですけれども、現場のほうに行くと、結局いまの学校は進学実績をどう伸ばすか。そこで模擬試験をやらされ、要するにどこの国立に何人入れたとかいうので競争させられているので、そうするといわゆる穴埋め式の教育をやって、テストで点数をとる技術をとにかく身に付けさせるというほうに、どんどん行っているのです。その中で、これもやれと言われるわけです。あと、オリンピック、パラリンピックの教育もやれと。どんどん上乗せされていくのです。たぶん夏休みってそのうち 2 週間くらいになると思います。それくらい時間がないんです。ですから、子供が自由にものを考えたり、話をしたりする時間がどんどん削られています。これは今後止まることがないので、個人的には何もしないでほしいくらいです(笑)。

ですから、詰め込み教育をやって穴埋め問題を解かせたいのであれば、それだけしかしないでほしいくらいです。そうしないと本当に、SDGs やりましょう、オリンピック、パラリンピックやりましょう、それから社会福祉教育なんかもやりましょう、それがどんどん時間を圧迫していくのです。そうすると夏休みが短くなり、土曜日がなくなり、より効率的に詰め込める教育メソッドがどんどん入ってきます。ですから、僕は日本の教育はすごく貧しいと思っています。まったく豊かになっていかないのです。どんどん量だけが詰まっていくのです。なので僕は、学校から子供たちを解放していただきたい。

でも、いままたもう一つ、e ポートフォリオというのを今度の大学入試などに使おうという動きがあります。これは、そういうところに研修に行った、インターンシップで行った、こういう活動をした、ボランティアをやったというのを大学入試に使おうとしているのですが、これは一見いいように見えて、子供たちは 24 時間 365 日監視されることになります。ですから、入試のために研修に行くのです。本当にもう、「これ、3 日間やったからいいですよね。はんこください」のような、そのような使われ方をするようになりかねないと思います。しかし詰め込み教育の部分は減らないので、その時間はとにかく、できるだけ効率的に短時間で、「いっぱいはんこ押してもらいました」というのをするように、たぶんなっていきます。あれも僕はやめてほしいのですけれども、そのようにもうたぶんなっているので、僕は教育にすごく閉塞感を感じている。学校から子供を解放していただきたいくらいですね。

（阿部） 教育というのは本当に未来をつくる大切なものなのですが、そのうち大学入試で、SDGs について云々というのは出てくると思います。ただ、きょう来てくださっている大学生の方、近大以外の方もいらっしゃるようで、これは近大の学生さんですが、詰め込みのそういった教育ではなくて、こういうところを書かれています。SDGs について、いろいろ知る機会をもっと増やしてほしいと。やはり一人一人が知っていないと、つまり学校の知識としての SDGs、企業でやらなきゃいけない SDGs、地方自治体で押し付けられてやる SDGs じゃなくて、一人一人が動くことをするためには、やはりいろいろ知ること。SDGs がどういったことか。そういった機会をもっと増やしてくれと。これは決して、いまの教育制度の中で SDGs を教育してほしいということではないということです。

（梶谷） 本当はこういうのは、それなりのやり方がたくさんあると思います。だけど、そういうほうにまったく行っていないのです。こういうのが来れば来るほど、子供たちが苦しくなっているのを目の前で見ると、どうなのだろうという感じがします。

（阿部） そこを考えなきゃいけない立場にいるということですね。

（梶谷） 僕がどうにかできるわけではありません。この間、英語 4 技能試験が、高校生が声を上げたのをきっかけにして、とりあえず延期になりましたね。あれはすごく画期的だと思います。ああいうのも、大人たちがあれをやれなかったのは、すごく恥ずかしいことだと思います。高校生に頑張ってもらいたいと思いながら。

（阿部） 冒頭の基調講演で対談させてもらったときにご紹介しましたけれども、五ヵ瀬の中等高校の高 1 に当たる生徒さんが、17 の目標だけでは何か足りないものがあるということで、18 番目ということでいろいろ考えた。この生徒さんというのは夢だらけなのです。夢を語ってくれる生徒さんばっかりですね。

（梶谷） 五ヵ瀬はいいですよね。個別にはいいところはある。

（阿部） せっかくですからいまの流れで、いくつか自分たちで考えた 18 番目の目標で、面白かったのは平和構築に関する問題。このへんを一つだけご紹介したいけれども、武器をなくしたらいいじゃないかと。そういう目標をつくればいいと。何でそれが入らなかったのだろうなということだろうと思いますが、実は SDGs というのは、よく考えられてはいるけれども、これもまた別の方の質問の中に、大国の関与というのはいったいどうなっているのだというのもありました。国際政治の中で決まったことであります。国連で一応していますが、必ずしもこれさえ達成すればというものではなくて、自分たち一人一人で考えていくことが大切なことだと思います。

まだもう少し時間があるようですので、もう一度、今度は皆さんが考える 18 番目の SDGs の目標というのを、こんなのはどうだろうというのがあれば、お聞かせいただきたいのですが。これは梶谷さんのほうから行きましょうか。

（梶谷） 先ほど、教育の話でしたっけ、企業さんにどうやって知っていただくかという話で出ていたと思いますけれども。SDGs の話に限らずですけれども、学校教育のことで少し関連付けて話をさせていただくと、例えば五ヵ瀬の学校は、うまくいっているところがあります。

僕が関わってうまくいっているというのは、何を言っているかというと、わりと早い段階で僕がいなくてよくなっているということなのです。勝手に動くようになるということです。ですからその意味で言うと、例えば僕が行って、すごくみんなが一生懸命にやってくれているのだけれども、僕が行かなきゃ一生懸命やってくれないみたいな状態は、要するに手が離せていないのです。それが、僕が行って間もなく向こうの方でいろいろと勝手にやってくれて、僕はもう行かなくてもいいくらいになっているのです。その意味で言うと、彼らがやりたいことを、どうかたちにするかというところでのサポートをする。こっちがやりたいことをやらせたいのではなくて、向こうがやりたいことが何かが重要です。そこでたぶん、哲学対話がすごくうまく機能しているのは、彼らが、自分たちがやりたいことが何かを考えるきっかけになっているのだろうと思います。直接それが生かされているかどうか見えないので分からないのですけれども、やった結果、彼らが結構自発的に動くようになる。

あとは、五ヵ瀬がすごくうまくいっていると思うことがあります。先生って結構、甲斐がないと思うことってあるのではないか、いっぱい教えているのにまったく覚えない、宿題を出すのにやらないなどです。そういう点で、学校の先生ってやりがいがないというか、それこそ閉塞感を感じていることが多いと思いますけれども。五ヵ瀬の先生がそこから解放されたのは、生徒に学ぶことを任せるようになってからです。極端な先生は授業の準備をしなくなったくらいです。そうすると生徒が勝手に学んで、宿題を出してくれと生徒が言うのだけれども、先生は断固として出さないというくらいに変わっていく。そうすると、生徒が勝手に勉強するので進学実績も自然に上がるのです。結果としてはそっちのほうがいい。尻を叩いて強制的にやらせて進学実績が伸びるのと、勝手にやらせて伸びるのとでは、勝手にやって伸びたほうがいいじゃないですか。尻を叩いてもやらない子はやらないですよね、どっちみち。強制的にやらせる意味なんて、僕はあまりないと思います。できない学校の子には、強制的にやらせなきゃいけないのだと。宿題をいっぱい出して。でも、そういう子たちはどっちみちやらないですから。だったら、その子たちが何をしたいか、興味を持ったことを見つける手助けをしてあげたほうが絶対にいいのですけれども、先ほども言ったように、なかなか教育ってそういう方向に行かない。それってたぶん、開発援助なんかでも共通した部分があるのではないかと思います。というようなことで、僕は、ちゃんとそれぞれがやりたいことをやれる世の中にしてほしいというのが。

（阿部） それが 18 番目の。

（梶谷） 18 番目のと言いますか、やりたいことをやることほど、持続的にできることはないのです。

（阿部） 強制されない。17 をいままで挙げているけれども、これは強制ではないということが、18 番目の目標と。

（梶谷） まあ、これがじゃないですけれども、それぞれがやはり（強制であってはいけない）。それは結局、尊厳ですよね。それぞれの人間としてのあり方や人格を、尊重されるということが一番大事かと。

（阿部）「尊重」。SDGs という目標に向かっている…

（梶谷） それは結び付けようと（笑）。

（阿部） 僕、司会やっていて嫌になるの。何とか SDGs に持っていこうとして…

（梶谷） とりあえず流せば、こちらがちゃんと結び付けてくれますから。

（阿部） もう、まとめることは諦めたという姿勢で行きますけれども（笑）。

（梶谷） まとめなくていいです（笑）。

（阿部） でもいまおっしゃったこと、そして質問の中にも、実は関連していることがあります。SDGs というのが強制になっている、これは少しおかしいのではないかというご意見もありました。まさにいま、梶谷さんが言われたことだと思います。これは一人一人が主体的に、尊厳を持ってやっていくことであるということが、あえて 18 番目に挙げなくても大事なことだろうと思います。それでは、禮子さん。

（井上禮） 先生があまりに教育にネガティブなので、びっくりしています。ただ全般的には、日本の教育全般を見ればおっしゃるとおりだと思います。しかし、私どもも NGO として、ささやかに教育部門というのを持ってやっているのです。これはどちらかと言うと、大学生と高校生くらいを対象にしてやっているのですけれども、大学生よりは高校生のほうが、高校生よりは中学生のほうがずっといいのです。それだけ新しいことに出会ったときに柔軟に受け入れてくれる。まったく知らなかったことを、事実をそのまま受け入れることができるという感性を持っているので、私たちはそんなに絶望的ではないのですけれども。

例えば、むしろ新しい目があって、いま、マレーシアやフィリピンでも、EVA も、スマホさえあれば何でもできるじゃないですか。翻訳もスマホがどんどんやってくれるじゃないですか。そうすると高校生でも、例えば私たちがマングローブの植林

をしているところに、2 週間なら 2 週間、学生さんに行ってもらってやるというようなプログラムを持っているのです。それをやります。その過程で、農家さんや漁師さんのお嬢さんたちと友達になるわけです。本当に友達になって、言語に関わりなく、そのあともスマホでずっとコミュニケーションを続けているのです。そのまま、気が付いたらその子が大学生になって、相手は 18 歳くらいですから、結婚する。村で結婚式がある。大学生になったその人が、その結婚式に行くみたいなことが発生しているのです。

そういうかたちで人と人がつながっていかれるということが、いろいろなチャンスの中でつくっていかれるし、それが学びの場でもあるので、私はやはり依然として、大多数の現実はおっしゃるとおりだと思いつつも、やはり希望がすごくあるのではないかなと思っています。そういう希望をいっぱいつくってあげるのが、私たちの仕事でもあるだろうなとは思っているのです。たしか、どなたか会場の方が 18 番目の目標に「武器のない社会」をお書きになったのですよね、阿部先生。

（阿部） はい。

（井上禮） 18 番目のというのは、とても賛同するのですけれども、私はやはりこの 1 から 17 の目標というのは、別に誰かが誰かに強制するものではなく、やりたいと思う人がやりたいと思うことを選んでやっていけばいいのです。みんながみんな全部できるわけがないので、その中の一つの課題でも見つけたらやれるのではないか。ですから、一人一人が自分で選ぶ。そして、人と人がつながっていく。これが SDGs の 1 から 17 までの過程で大事なことかなと思っています。

（阿部） ありがとうございました。それでは、真さん。

（井上真） 私の関心事項が、以前からよく妻とも話しているのですけれども、日本は日本語の社会なので、英語の情報が入ってこないのです。そうすると、世界の情報が、限られたものしか日本語で翻訳されてきていないことから、すごく世界が狭くなっていってしまう。自分が関心のない国が、たぶん世の中に皆さんたくさんあると思います。

例えばそこらの人をつかまえて、「アフリカのタンザニアについてどう思いますか」と。「いや、そんなの知ったことないよ」というような返事が来てしまうと思いますけれども、無関心というのは一番物事の、世界を良くするためのハードルになっていると思っています。やはりいろいろな国で起きていること、その国そのものに関心を持ってもらうというところが、SDGs をやる上でも大前提になってくるんじゃないかなと思います。

もちろん、英語を勉強することや言語を統一化するなどをすれば、どんどん情報が入ってくるのでしょうけれども、そこは少し現実的じゃないので、一つ解決策として私が思うのは、世界中の国の一カ国に一人、自分の友達をつくるというところです。友達がいれば自分ごと化しますよね。私もフィリピンに友達がいるので、フィリピンで災害があると大丈夫かなと心配しますし、情報をとったりします。そういう、何かしら自分とつながりがある人が世界中にいるというところは、SDGs をやるきっかけにもなるかもしれませんし、やれなくもない。そんなにハードルは高くないけれども、やれるとすごく効果的なものじゃないかなと思って。ぜひ 18 番目に「世界中に友達をつくる」みたいなのをつくりたいなと思います。

（阿部） ありがとうございます。最後になりますが、中嶋さん。

（中嶋） またまた難しい質問で、18 番目をいまずっと考えていたのですけれど、5 つくらい頭にうかびました。時間がないので 1 つ選びますと、きょうの社会貢献、社会課題の解決と企業のコラボレーションということですけれども、やはりお互いの立場をしっかり尊重しないといけない。少しきれいごとに聞こえますけれども、理解しないといけないなと思いました。

私が目にした限りで SDGs の取り組みをやろうという方の多くは、「自分たちはこういう考えだから、賛同してくれる人を探す」という感じで、自分の領域から全部スタートする人が多かったのです。それに合致しない人は違うと。ただ、それだとなかなかビジネスも広がらないと思いますので、相手の尊重をしっかりする。この中で言うと、パートナーシップに含まれるのだろうと思いつつも、パートナーシップが一番の課題だと思いますので、お互いの立場の尊重、理解、信頼。これが改めて 18 番目に加えてもいいのではないかなと思いました。

（阿部） ありがとうございます。18 番目、日本語で言うと「おはこ」ということになるのかなと思いますけれども、自分の関心のあるところで、4 人のパネリストの方に 18 番目が何か考えていただきました。まさに、考えるというのは大切なことだと思います。

もう一つだけ同じような質問をしようと思っていたのですが、もう時間ですのでしません。それは何かというと、いろいろな企業として、研究者として、NPO として、いろいろなかたちで SDGs に関わっていく。それだけではなくて、やはり一人一人、個人としてこの SDGs、つまりその先にある、社会をいい方向に変えていくという目標に向かって、自分自身の SDGs というと変な言い方ですが、マイ SDGs もあるのではないかと。それを 4 人の方にお聞きしようと思いましたが、18 番目の SDGs と重なります。例えばということで、いくつかそういったかたちで質問票にご自身の SDGs 目標を書いてくださった方がいらっしゃいます。一つだけご紹介します。

例えばという例ですけれども、この方は家族との時間を増やすというのが自分自身の SDGs だと。変えていくためには大事なことだと。皆さま一人一人が、実際にどうやって SDGs の目標達成、さらにその先にある、社会をより良い方向に変えていくのか。一人一人ができることはいろいろあるのではないかと、そのように思います。そういったことを考えさせてくだ

さった、4 人のパネリストの方に改めてお礼を申し上げて、このパネルディスカッションを終わらせていただければと思います。どうもありがとうございました。

（終了）